カラスの被害対策

カラスの基礎知識

日本には数種類のカラスが生息していますが、農業被害で問題となるのは、ハシブトガラスとハシボソガラスの２種類です。体が大きく、くちばしが大きいのがハシブトガラスで、それよりひと周り小さく、くちばしが細いのがハシボソガラスです。

◇ハシブトガラス　全長約56cm、体重700g前後、全身黒色で、嘴は太く、上顎は湾曲しています。「カア、カア」など澄んだ声で鳴く。東南アジアにも分布しています。

◇ハシボソガラス　全長約50cm、体重500g前後、全身黒色で、嘴はハシブトガラスより細く、湾曲は少ない。「ガアァ、ガアァ」と濁った声を出します。ユーラシア大陸に広く分布しています。

① 食べ物

雑食性で、残飯や動物の死体など何でも食べる。昆虫、果実、ザリガニやカエル、鳥の卵や雛などの自然の餌も食べている。蛾や甲虫類の幼虫、セミなども好んで食べるため、害虫退治にも一役買っている。ハシブトガラスはハシボソガラスに比べて動物質の餌を好む傾向があります。

② 行　動

ハシブトガラスは日本全国で、ハシボソガラスは九州よりも北の地域で一年中見ることができます。ハシボソガラスはハシブトガラスよりも、田畑など開けた環境でよく見られます。

秋から冬には若鳥を中心とする群れが多く見られ、数百～数千羽が林地に集まることがあります。

③ 繁　殖

カラス類の繁殖期は３～７月で、地上10～20mの高さの樹上や高圧鉄塔などに、枯れ枝や針金などを使って巣を作り、3～５個の卵を産む。抱卵は雌だけで行い、20日前後でふ化し、雌雄で雛に餌を与えて約35日で巣立ちます。繁殖期に直径数百mのなわばりを作り、つがいで守ります。

カラスの被害対策

野生動物による被害対策の基本は3つで、①有害捕獲等による生息密度管理、②防護柵等による被害管理、③集落内の放棄果樹対策などの生息地管理などが被害対策のポイントとなります。

◇　物理的防護策を講じる

防鳥網で完全に覆うことが出来れば最も良いですが、カラスの飛行は小回りが利かないので、防鳥網で周囲を囲たり、作物に直接かけたり、テグスやひもを張り巡らすといった方法でも、一定の効果が期待できます。

◇ 追い払い用具による対策

カラスの追い払い用具として爆音器等がありますが、使用に当たっては、カラスを馴れさせないために、出しっぱなしにしないで必要な時だけ設置して下さい。用具の種類や位置、組み合わせなどを頻繁に変えて、常にカラスに 警戒心を持たせておく工夫が大切です。

◇ カラスの食べ物を出さない

生ゴミ、家畜飼料、墓のお供え物などをカラスが食べられる状態で放置しないことが大切です。常に餌がたくさんある場所では、カラスが群れになりやすくなり、周辺で被害が増えますので、カラスの餌をなくして地域のカラスを少なくしましょう。

◇ 駆除による個体数調整

移動能力や繁殖力が高いカラスの生息数を駆除で減らすことは困難です。カラスの駆除は、全体数を減らすのが目的ではなく、「本物の」威嚇を目的として行い、守りたい圃場付近で被害が起きる直前から被害期間にかけて、銃器によって実施すると効果的です。

◇ カラスという鳥について

「人を襲うカラス」などで、マスコミに取り上げられることがありますが、必要以上に恐れることはありません。「カラスに襲われる」ケースは、子育て中の親ガラスが、巣や雛に近づいた人間の周囲を飛び回るもので、時期としては６～7月頃に限られます。まれに後頭部を足で引っ掻くことがありますが、嘴でつついたり、集団で襲うようなことはありません。